

2 「カーリングのまち」北見市にある「アルゴグラフィックス北見カーリングホール」

3 デジタル技術を活用した打合せ



SDGs 推進に向けた取り組み

地方圏において誰もが住み慣れた地域で暮らし続けられる
仕組みづくりプロジェクト

地方圏にあっても広域連携によるスケールメリットを活かした住民への福祉サービス提供体制を構築するとともに、農福連携などを柱とした障がい者就労支援を加速する生産年齢人口減少への対応につなげ、高齢者や障がい者など誰もが住み慣れた地域で暮らし続けられる仕組みをつくり、ローカルSDGsの取り組み促進を図る。

①障がい者の地域生活支援体制の構築

行政、医療、障害福祉サービス事業所等の関係機関が連携し、障がい者の生活を圏域全体で支える体制を構築

○第一多機能拠点

令和2年度に北見市内に新設した施設を位置付け居住支援のための相談、緊急時の受け入れ・対応、体験の機会・場、専門的人材の確保・養成、地域の体制づくりなどの機能

○第二多機能拠点

美幌町内にある療育病院の機能を拡充

①と②を深化させるための仕組みづくり

1. オンライン相談の提供～広域での専門職のシェア～
2. 関係機関との連携強化・職員のスキルアップによる質の高い相談の提供
3. デジタル技術を活用したリモート窓口システムの整備

③を深化させるための仕組みづくり

1. ステークホルダー「オホーツク障がい者就業・生活支援センターあおぞら」との連携強化
2. センターと連携した重点分野でのお試し就労(職場体験実習)の推進
3. 次なる重点分野の掘り起こし



4 圏域で障がい者の就労・生活支援の機能を果たす「オホーツク障がい者就業・生活支援センターあおぞら」

地域特性と課題

本事業は北海道東部に位置する北見市(代表)、美幌町、津別町、訓子府町、置戸町の1市4町の広域連携モデル事業である。

《北見市》

北見市は、オホーツク海とサロマ湖に面し、農作物やオホーツク海域の海産物をはじめ、森林資源や温泉などの多彩な地域資源を有している。北海道オホーツク総合振興局管内の中核都市である。

《美幌町》

美幌町は、農林業を基幹産業とし、J R 石北本線や国道4路線、道道6路線が縦横断、女満別空港が近く、管内の交通の要衝となっている。また、

陸上自衛隊美幌駐屯地があり、地域と密接な関係を築いている。

《津別町》

津別町は、町の全面積の約9割を森林が占め、農業と林業及び製材・木製品製造などの林産工業が基幹産業である。近年は、木質バイオマスを利用した資源の地域内循環の活用に取り組んでいる。

《訓子府町》

訓子府町は、面積は管内で最小だが、オホーツク

海に注ぐ常呂川が町の中央を流れ、それに沿い肥沃な土地が広がる。畑作や酪農などが発展しており、全国屈指の生産量を誇るたまねぎや良質な訓子府メロンなどを生産している。

《置戸町》

置戸町は、町の全面積の約8割を森林が占め、林業が発展し、丘陵地や平地では畑作や酪農が盛んである。地域の木材を利用したブランド「オケクラフト」を展開している。

人生100年時代において、全ての圏域住民が、住み慣れた地域でいきいきと人生を過ごしていくためには、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念に沿い、地域も従来の枠組みにとらわれず、変革し、人々や地域同士が互いに連携する新たな地域社会づくりが必要である。しかしながら、圏域では、「地域福祉を担う人材不足」や「物理的な距離がもたらす支障」といった課題を抱えていた。

北見地域定住自立圏形成協定 締結式



11 市4町で北見地域定住自立圏を形成(令和元年10月18日)

推定樹齢1200年のミズナラ(津別町)

北見市	人口(令和2年国勢調査): 11万5480人
面積(参考): 1427.41平方キロメートル	
連携都市	
美幌町	人口(令和2年国勢調査): 1万8697人
面積(参考): 438.41平方キロメートル	
津別町	人口(令和2年国勢調査): 4373人
面積(参考): 716.8平方キロメートル	
訓子府町	人口(令和2年国勢調査): 4677人
面積(参考): 190.95平方キロメートル	
置戸町	人口(令和2年国勢調査): 2775人
面積(参考): 527.27平方キロメートル	



※上図は北海道オホーツク総合振興局管内を表す



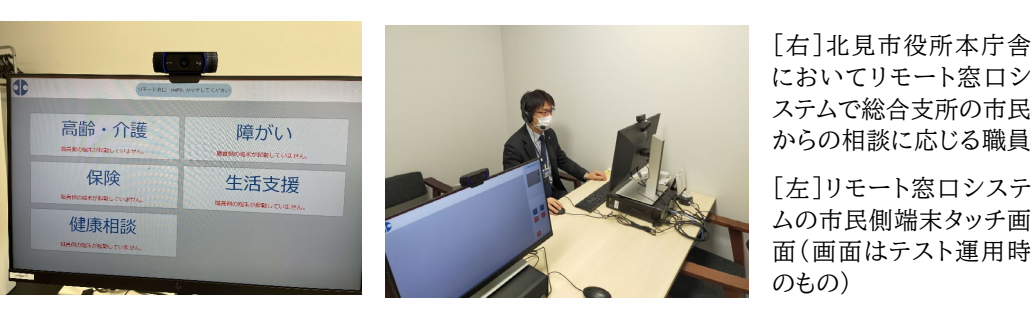
SDGs推進に向けた北見市、美幌町、津別町、 訓子府町、置戸町の連携による取り組み

北見地域定住自立圏形成
北見市、美幌町、津別町、訓子府町及び置戸町は互いに経済圏や生活圏を共有するような関係にあったことが1市4町での取り組みのきっかけです。
そのネットワークを更に強化するため、北見市長が4町長に呼びかけ、賛同をいただき、2019年10月に北見地域定住自立圏が形成されました。
その後、まず取り組んだのが、1市4町の行政と医療、障害福祉サービス事業所等が連携して障がい者の生活を圏域全体で支える体制の構築でした。
これは、障がい者ご自身の高齢化、障がいの重度化、親亡き後を見据えたもので、2020年度に第一多機能拠点として北見市内に専門人材確保を目的に居住支援のための相談・緊急受け入れ対応拠点を整備しました。

また、第二多機能拠点として、美幌町にある療育病院の機能を拡充しました。
1市4町の課題と取り組み
このような福祉分野での1市4町で連携した取り組みを背景に、更に潜在化している課題を洗い出してみると、福祉ニーズの多様化や複雑化に伴い、相談件数が増加傾向にある一方、小規模な4町の福祉相談窓口や社会福祉協議会においては、非定型のかつ専門性の高い業務に対応できる人材確保・育成が課題となっていました。
もちろん4町や社会福祉協議会においても採用試験の時期を早めるなど、人材確保に向けての工夫や対応をしているのですが、それに加え、北見地域定住自立圏の枠組みの中で、人的連携を進める必要があると考えました。
しかし、人的な連携を進めるとなると、物理

的な距離が課題となりまして。
東京23区の約5倍にも及ぶ広大な面積を有し、公共交通網も脆弱な当圏域においては、会議をする会場となる市役所や町役場庁舎などへの職員の公用車での移動が避けられず、遠距離移動に伴う時間のロス、車からのCO₂排出、冬季の雪や路面凍結による交通事故リスクといった課題を抱えていました。このため、デジタル技術を活用してオンラインによる会議などを行える環境を1市4町の行政や社会福祉協議会などに整備し、オンライン会議を積極的に導入することになりました。
車を使わないことでCO₂削減という相乗効果も期待できます。
さらに、デジタル技術を有効に活用し、感染症のリスクや脱炭素社会などにも適応した仕組みづくりを進める観点から、職員とオンラインで相談ができるリモート窓口

1 「天下の絶景」と謳われている美幌峠（美幌町）



システムを北見市の本庁舎と3つの総合支所間に先行して導入しました。
このリモート窓口システムの導入により、専門職

[右]北見市役所本庁舎においてリモート窓口システムで総合支所の市民からの相談に応じる職員
[左]リモート窓口システムの市民側端末タッチ画面（画面はテスト運用時のもの）

を本庁舎へ集約して配置することで人材不足の解消を図るとともに、地域住民が最寄りの総合支所で本庁舎の専門職と遠隔的に対面で相談できる体制が整いました。
このほか、全国の地方圏にも共通する課題ですが、少子化・高齢化による生産年齢人口の減少が加速化し労働力が不足していることも大きな圏域の課題となっています。
その一方で、知的・精神障がい者は増加傾向にあり、これらの方々の労働市場への参画は意義がありますが、就業意思があるのにできない、続かないといった課題もあります。
このため、障がい者に関心のある事業者を増やし、地域特性を活かした農福連携などを柱とした障がい者就業につなげることで、課題解決を目指すこととしています。

ステークホルダー間の連携
とりわけ、障がい者就業支援については、「オホ
今後の展開
今後は、リモート窓口システムの北見市での導入効果などを4町にフィードバックし、将来的な4町での導入の検討材料としていただくほか、福祉分野でのこれらの取り組みを土台に、他の分野への将来的な拡大につなげていきたいと考えています。

2 北海道産木材を使用した地域クラフトブランド「オケクラフト」（置戸町）
3 特産品訓子府メロン（訓子府町）
4 農福連携の一環として、障がい者も農作業に従事（JA きたみらい）